

前期日程

令和5年度入学試験問題（前期日程）

国 語

（教育学部）

——— 解答上の注意事項 ———

- 1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。
- 2 問題冊子1冊と解答紙2枚がある。
- 3 問題は3問ある。（すべての問題に解答すること。）
- 4 問題の解答は、解答紙の所定の解答欄に記入すること。
- 5 問題冊子は持ち帰ること。

一 次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】をよく読んで、後の問いに答えなさい。なお、出典はいずれも今野真二著『うつりゆく日本語をよむ』による。(設問の都合上、原文を一部改めたところがある。)(50点)

【文章Ⅰ】

一九九七年九月十日の『朝日新聞』の朝刊に「このところ、二歳半の息子を大声でしかりつけることがとても多くなっているのですが、そんな時、まさに『心に刺さる言葉』を連発している自分を改めて思い知らされました。『ダメダメ』『早く早く』『何やってるの』そしてシメくくりの『いい加減にしなさい』。夜、息子のやわらかな寝顔を見ながら、今日もまたやってしまった、と思う日は、常に家事に追われ、時間に追われている。ゆとりのない自分がたまらなく嫌になります」という記事が載せられている。右の「心に刺さる言葉」は言い換えれば「きついことば」であろう。

一方、二〇一九年五月二十九日の『朝日新聞』夕刊の「小説家の役割として、『もつと良質な娯楽を提供することではないか。本を開けば、差別するより楽しく深く心に刺さる世界がある、あるいは現実よりも魅力的な悪やフキンシンがあることを示すことではないか』と語った。協会の代表理事、京極夏彦さんはこのスピーチに同意し、『こうした風潮をタカイするのは優れた創作。我々は優れたコンテンツを生み出し、世に広めなければいけない』と応じた」という記事における「心に刺さる世界」は「楽しく深く」が修飾し、京極夏彦が「優れた創作」「優れたコンテンツ」と表現していることからわかるように、だいたい粗いとらえかたではあるが、プラスかマイナスか、といえば、プラスの表現ということになる。

あるいは二〇二〇年五月一日の『朝日新聞』朝刊の「キャスターたちの言葉」という見出しの記事には、「ただ、医療従事者などへ心ない言葉が飛んだり、建設的な批判ではない、罵詈雑言めいた言葉がネット上にあふれたりする今だからこそ、視聴者に語りかけるようなシンミな呼びかけが心に刺さるのだと思う」とある。

これはか<sup>A</sup>つてマイナスの表現として使われていた「心に刺さる」が現在ではプラスの表現としても使われているということなので、時間の経過とともに、言語が変化するということである。言語が時間の経過とともに変化することはわかっている。したがって、このこと自体は「あり得ること」といってよい。

右で述べた、使用の変化は小型の国語辞書の語釈によっても確認できる。二〇一一年十一月に出版されている『岩波国語辞典』第七版新版の見出し「ささる」は「先のとがった物が他の物に突き立つ。『とげがー』と説明されているが、二〇一九年十一月に出版されている『岩波国語辞典』第八版では、右の語釈が①で、さらに「②線状の物が鋭く当たる。『直射日光が目』」「視線がー」③驚きや感動を強く与える。「心にー言葉」という二つの語釈が加えられている。二〇二〇年十一月に出版された『新明解国語辞典』第八版は見出し「ささる」を「とがった物の先が何かの表面を突き破って、中に入る。『とげがー』

言葉が「[強い印象を残す]」と説明している。

また、三省堂が行なっている「辞書を編む人が選ぶ今年の新語」では、二〇一五年に「深く納得したり、共感したりできる」という語義で使う「刺さる」が九位に選ばれている。

したがって、「心に刺さる」という表現が二〇一五年頃からプラスの表現として使われ始めた、ということはいわば「事実」だ。そのことは辞書の記述によってもわかる。その一方で、筆者が気になるのは、そういう使われ方を辞書は、「事実」として反映させているが、日本語の動詞「ササル」の語義の基本は「先のとがった物が他の物に突き立つ」で変わらないということだ。

「心に刺さる言葉」であれば、刺さるのが言葉なのだから、言葉が「先のとがった物」でなければならぬ。筆者が「ササル」という動詞ですぐに思い浮かべるのは「トゲ」で、次は何か先のとがった棒状の物だろう。そういう物が思い浮かぶ。そうであるとして、「コトバ」は「先のとがった物」じゃないよな、と思ってしまう。またそもそも「物」でもない。そんなことをいえば、「ココロ」だって物じゃない。つまり、「コトバ」が「ココロ」に刺さっている映像を思い浮かべることはできない。映像として思い浮かべることができないということは、それは具体的な物ではないということだ。具体的な物、具体的な映像に結びつけ、そこからさらに深く「情動」に結びつけることで、言語表現はしっかりと自分の側のものとして理解できる。

そしてまた、「棘が指に刺さった」時の痛みからすると、自分の体に何か刺さったら痛いだろうと自然に思う。バラの小さな棘であっても、かなり痛い。心は目には見えないけれども、それが身体にあるのだとすれば、そこに何か「先のとがった物」が刺さったら、心は痛むのではないかと思う。だから、「心に刺さる」が痛みを伴う表現として使われることは理解できる。しかし、「先のとがった物」が刺さってよかった、とは思えない。

「心に刺さる」をプラスの表現で使うということは、言語がどこかで結びついているであろう「身体性」を失ってしまったように思われる。<sup>B</sup>「身体性」から切り離されたことばはふわふわと漂うのではないだろうか。身体性とともにある「感覚・感性」は生物としてのヒトのもっとも根底にあるよりどころといってよい。ヒトが生物である限り、すべてのことはそこが原点といってよいかもしれない。そう考えると、「身体性」「感覚・感性」にかかわる言語表現は安定してほしいし、そこが大多数の人が「共有・共感」できるところでもあるはずだ。言語は共有されているのが言語だといってもよい。だから「共有」は言語にとって重要だ。

注 京極夏彦……小説家。推理作家協会の代表理事を務める。

三省堂……出版社。『新明解国語辞典』を刊行する。

## 【文章Ⅱ】

二〇一五年一月十日の『朝日新聞』朝刊に漫画家のみつはしちかこの記事が載せられていた。そこには「ちいさな女の子のチッチと、のっほの男の子のサリーはたぶん、マンガ史上、最大の身長差がある高校生カップルだろう。チッチのいちずな片思いを描いた叙情マンガ『小さな恋のものがたり』、略して『小恋』<sup>ちいこい</sup>は連載が始まってから約半世紀がたつ。昨秋に出た新刊が、ひとくぎりつける完結編になった。『小恋の時間はメリーゴーラウンドのように堂々めぐりをしていただけなのですが、やっと時計を進めて、チッチに成長してもらったことにしました。大人になり、サリーとの結婚とは別の夢を見つける未来を描きたくなった』とある。

みつはしちかこが実際に右のように話したかどうかは不明であるが、記事には「メリーゴーラウンドのように堂々めぐりをしていた」とある。「ドウドウメグリ(堂堂巡り)」の原義は「願掛けのために、神社や寺の建物の周りを何度も歩き回ること」(『集英社国語辞典』第三版)であり、そこから「思考や議論などで、同じ内容が何度もくり返され、進展しないこと」(同前)という語義に転じた。現在「ドウドウメグリ」は転義において使われることが多い。「ドウドウメグリ」には「進展しない」という含みが強いように思われる。

「メリーゴーラウンド (merry-go-round)」は回転木馬などと訳されることもあるが、遊園地などに置かれ、「円形の大きな台に並べて取り付けた木馬などが台の回転につれて上下する」乗り物である。「台の回転につれて木馬が上下する」からこそ乗り物としての意義があるので、それゆえ「回転木馬」という日本語訳がつけられていると思われる。

「回転木馬」というと、筆者ぐらいの年齢の方は、「ぐるぐる回る回転木馬」という歌詞の歌を思い出すのではないだろうか。調べてみると「Mon Manège à Moi」<sup>あまのまにげ</sup>という題名のシャンソンであった。昭和三十九(一九六四)年頃にはNHKで「うたのメリーゴーラウンド」という番組もあったことがわかったが、その中でも、この「回転木馬」の歌は紹介されていたようだ。この歌を知っていると、回らないメリーゴーラウンドは「あり得ない」ということになりそうだ。

「メリーゴーラウンド」がぐるぐる回る回転することと、「ドウドウメグリ」が寺社の建物の「周りを何度も歩き回る」とは根本的に意味合いが異なる。<sup>D</sup>そこまで考えると、「メリーゴーラウンドのように堂々めぐりをしていた」は表現として落ち着きがよくないと感じるようになる。

「回らないメリーゴーラウンド」が表現としてどのくらい存在しているかを調べてみると、二〇〇四年八月二十七日の『朝日新聞』朝刊(徳島版)の「樹木文様、気迫込め 日本伝統工芸展、井戸川さん入選」という見出しの記事中に「井戸川さんは昨年、四回目の入選で日本工芸会の正会員になった。『今回は、気持ちの上で守りに入るのが怖かった』と振り返る。入選作は、標準よりやや小ぶりの『銀泥彩磁樹木文大鉢』。鉢の内側は俯瞰的に、外はメリーゴーラウンドのように樹木を描いた。『文様を描き込んでやろうという気負いが強く、窯から出したとき描き過ぎたかなあと思っていたので、選ばれてよかった』とある。

「メリーゴーラウンドのように樹木を描いた」は、大きな鉢の外側にぐるりと樹木が描かれているということであろう。樹木の一本一本が、遠くから見ただけの状態の木馬なのだ、と言えないこともないだろうが、回転はしていないはずだ。鉢の外側の樹木模様を、見る人が視線でぐるりと追いかけるということが「回転」なのだろうか。「雰囲気」はわからなくもないが、「メリーゴーラウンドのように」の「ように」はあまりきいていない。「外側にはぐるりと樹木を描いた」でもあるいは充分かもしれない。この「メリーゴーラウンド」はやはり回転していない。

「情報」をわかりやすく伝えるために、「AのようなB」という比較を使っているのに、その「ような」が「ような」でない<sup>な</sup>とわかりやすくならない。「ような」だからAとBとは「何らかの重なり合い」があるはずだ。右の二つの例の場合は「メリーゴーラウンド」と喩<sup>な</sup>えられている物との重なり合いがかなり少ないように思われる。

たぐさんの乳牛をのせて、搾乳する「ロータリーパーラー」という装置があるが、その装置を「メリーゴーラウンドのように回転する装置」（二〇一五年十一月十七日『朝日新聞』朝刊（岡山版））と表現している記事があった。牛はもちろん上下動はしないが、木馬のかわりに牛が並び、牛が乗っている台が回転しているようすは、「メリーゴーラウンド」とまずまずの重なり合いがあるといつてよい。それでも、結局は「メリーゴーラウンド」と「ロータリーパーラー」との重なり合いを言語で表現するならば、「ぐるぐる回る」ということになりそうだ。

「メリーゴーラウンド」を「ぐるぐる回る」ととらえると、「回転寿司」の店名として「メリーゴーラウンド寿司」があってもよいことになる。と書いてからインターネットを調べてみると、「回転寿司」を英語で「sushi-go-round」ということがあることがわかった！そして、「メリーゴーラウンド」を冠した回転寿司店もあった。

観覧車も「ぐるぐる回る」。回るスピードの違いはともかくとして、「メリーゴーラウンド」と観覧車とは、水平面で回るか、垂直面で回るかという大きな違いがある。「メリーゴーラウンド寿司」は成り立っても、「観覧車寿司」は成り立たないだろう。観覧車の中で寿司が提供されるのかと思ってしまう。「メリーゴーラウンド寿司」や「観覧車寿司」という店名を聞いた時に、人はどういうネーミングだろうと考える。それはどういう比較かを考えるということでもある。その時に、受信者の「よみ」が発信者の意図通りでなければ、比較はうまくいっていないといわざるをえない。

先に述べたように、比較は具体的な物をもって抽象的なことからを説明するのだから、具体的な物をどのように言語でとらえるかということが重要になる。具体的な物を言語で精密にとらえ、それが喩えられることがらとびつたりと合っているのが理想的な比較ということになる。こういう比較はわかりやすい。しかし、いつもそうとは限らない。読み手が思い浮かべるAと書き手が言語でとらえたAとがずれていると、比較がうまく機能しない。ずれているということは「共有」されていないということだ。書き手が（勝手に）粗くとらえてしまうと比較が成り立たなくなるが、そのようなことが増えているだろうか。

せっかく「メリーゴーラウンド」というかなり特徴のある具体物を比喩に持ち出すのだから、それに見合った細かい比喩であることが望ましい。「ぐるぐる回る」ということを伝えたいのであるなら、「ぐるぐる回る」と比喩を使わずに説明すればよい。それが比喩を使う前提であろう。だから、受信者は引き合いに出されている具体物をすみずみまで思い浮かべる。しかし発信者は「ぐるぐる回る」物として「メリーゴーラウンド」を引き合いに出していた。こうなると、比喩を使ったことであって理解が妨げられかねない。

「AのようにB」という比喩表現では、Aに説明しなくてもわかる「具体物」、Bに言語による説明が難しい「抽象的なこと」が多い。Aはあくまでも具体的で、Bはあくまでも抽象的で、AとBとを組み合わせることで、Bがきれいに理解できるというのが理想だ。ここまで採りあげた例では、Aのとらえかたが粗いケースが多かった。つまり、「具体物」の言語によるとらえかたが粗っぽいということだ。書き手がAを粗っぽくとらえていて、読み手は書き手よりも具体的に細かくAをとらえているという「ずれ」が比喩の理解を難しくする。

「書きことば」はゆっくりと読むことができる。あるいは繰り返し読み返すことができる。ゆっくりと繰り返し読み返すことによつて、比喩表現もじっくりと読み解くことができる。話すそばから消えていく「話しことば」ではそうはいかない。今の比喩はどういう比喩か、などと考えている間に話はどんどん進んでいってしまう。話し手も、話しながら、深いところまでびつたりしている比喩を考えている時間はない。だから、「AのようなB」もざっくりした比喩になりやすい。

つまり、右で整理してみたことは、比喩表現についての分析であるが、それは結局は「書きことば」がゆっくりと繰り返し読み返すことを前提にしなくなっている、ということにみえる。そういう意味合いでの「書きことばの話しことばへの接近」<sup>E</sup>、「書きことばの話しことば化」ということにみえる。

注 シャンソン……フランス語の歌謡曲。日本語訳されたものも含むことがある。

問一 二重傍線部ア～エのカタカナを漢字に直しなさい。

問二 傍線部Aについて、(1)「心に刺さる」が「マイナスの表現」として使われるときの意味、(2)「プラスの表現」として使われるときの意味を、それぞれ簡潔に答えなさい。

問三 傍線部Bとは対照的な内容を述べている最も適当な一文を【文章I】から抜き出し、最初の十字を答えなさい。

問四 傍線部Cについて、「安定してほしい」とはどういうことをいっているのか。わかりやすく述べなさい。

問五 傍線部Dについて、「メリーゴーラウンドのように堂々めぐりをしていた」という比喻を「表現として落ち着きがよくないと感じる」のはなぜか。筆者が考える理由をまとめなさい。

問六 傍線部E「書きことばの話しことばへの接近」、「書きことばの話しことば化」とはどういうことか。書きことばと話しことばの両方の特性に触れながら説明しなさい。

問七 【文章I】と【文章II】で述べられている筆者の主張または論の進め方に対し、反論や異論を出すとしたら、どのようなことが考えられるか。

次の条件①②を踏まえて記述しなさい。なお、反論・異論の内容は、文章Iに関することでも、文章IIに関することでも、両方に関することでもよい。

また、文章全体に関することでも、ある一部分に関することでもよい。(字数自由)

条件① 何に対する反論・異論なのかを明確にすること。

条件② 論拠を挙げて自分の考えを述べること。

二 次の文章は『狭衣物語』の一節である。狭衣中将は、幼い頃から兄妹のように育てられた従姉妹いとこの源氏の宮に恋心を抱いている。中将の恋心には周囲も源氏の宮も気づいていない。中将のことを兄のように思っている源氏の宮に、中将がついに告白するという場面である。文章を読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文の表記を改変した箇所がある。)(30点)

暑さのわりなきほどは、水恋みづこひ鳥にも劣らず、心ひとつにこがれたまふを知る人もなし。昼つかた、源氏の宮の御かたに参りたまへれば、白き薄物の単衣着たまひて、いと赤き紙なる書を見たまふ<sup>①</sup>。御色は単衣よりも白う透きたまへるに、額の髪ゆらゆらとこぼれたまへる、裾はやがてうしろとひとしう引かれいきて、こちたうたなはりたる裾のそぎ末、幾年を限りに生ひゆかむとすらむと、ところせげなるものから、たをたとあてになまめかしう見えたまふ。隠れなき御単衣に御髪のみまひまより見えたる御腰つき、腕などのうつくしさは、人にも似たまはねば、「あまり思ひしみにけむわが目からにや」とまもられて、例の胸はつぶつぶと鳴り騒げど、よく忍びかへして、つれなくもてなしたまへり<sup>A</sup>。

「いと暑きほどに、いかなる御書御覽するぞ」と聞こえたまへば、「齋院より絵ども賜はせたる」とて、くまなき日の気色にはなばなとにほひみちたまへる御顔つきを、まばゆげにおぼして、すこしうち赤みてこの御書に紛らはしたまへる用意、気色、まみなど言ひつくすべうもあらずめでたう見えたまふに、涙さへ落ちぬべうおぼえたまふ紛らはしに、この絵どもを見たまへば、「在五中将の日記をいとめでたう書きたるなりけり」と見るに、あひなうひとつ心なる心地して、目とどまる所々多かるに、え忍びたまはで、「こはいかが御覽する」とてさし寄せたまふまに、

よしざらば昔のあとをたづね見よ我のみまよふ恋の道かは

とも言ひやらす、涙のほろほるとこぼるるをだに、「あやし」とおほすに、御手をさへとらへて、袖のしがらみせきやらぬ気色なるに、宮いとあさまじう恐ろしうなりたまひて、やがてとらへたまへる御腕にうつぶし臥したまひぬる気色の、言ひ知らぬものにとらへられたらむやうにおぼしたるも、いとど心騒ぎして、こころ思ひつむる心のうちを、かたはしだにもうち出づべうもなく、涙にのみおほほれたまへり。

「いはけなく侍りしより、心ざしことに思ひそめたてまつりて、こころの年ごろつもりぬる心のうちは、あまり知らせたてまつらでやみなむも、誰も後世のためまですろめたう侍るべきにより、もらしはべりぬるこそあさまじけれ。またいとかうあるまじう見苦しきもの思ふ人のたぐひ、昔も侍りけるにやと見ゆるに、あまりうとましげにおほしめしたるも心憂くこそ。

<sup>B</sup> かくばかり思ひこがれて年経やと室の八島のけぶりにも問へ」

かたはしだにもらしそめつれば、年を経て思ひこがれて過ごしたまへる心のうちを、聞こえ知らせたてまつりたまふに、恐ろしき夢を見る心地したまひて、わななかれたまふを、「むげに御覽じ知らざらむ人のやうに、かばかりをだに恐ろしとおぼしたること」と、泣く泣く恨みたまふほどに、人近く参る



気色なれば、すこしのきて、「今よりはいかに憎ませたまはむずらむな。にはかならむ御心変りはなかなか人目あやしくはべらむ。おほしうとむなよ。岩切りとほしはべるとも、音聞もあるまじきことと思ひ知りたれば、よも見苦しき心のほどは御覽ぜられじ。あまりに思ひわびはべりなば、通はぬ里にぞ行き隠れはべらむかし。さやうならむ折は、さぞかしとおぼしめし出でさせたまへかしとてなむ」など、聞こえ知らせたまふことども思ひやるべし。

注 水恋鳥にも劣らず……水を恋い焦がれる水恋鳥にも劣らず。「水恋鳥」はカワセミ科の鳥。

こちたうたたなはりたる裾のそぎ末……ぎつしりと重なり合っている黒髪を削いでそろえた先端。  
在五中将の日記……「伊勢物語」のこと。

ひとつ心なる心地して……自分が在五中将(在原業平)と同じ心のような気持ちが出て。

袖のしがらみせきやらぬ気色なるに……袖を当ててもあふれる涙をせき止めかねるご様子に。

いはけなく侍りしより……幼い子どもでございました頃より。この中将のセリフは傍線部Bの歌まで続く。

誰も……恋をする者にとつても恋される者にとつても。

室の八島……室六所大明神の社前の池にある八つの島。池中から常に煙が上がっている。

岩切りとほしはべるとも……激情が奔流となっても。「吉野川岩切り通し行く水の音には立てじ恋は死ぬとも」の和歌を踏まえている。

音聞もあるまじきことと思ひ知りたれば……世間への聞こえもみつともないことと自覚しているから。

問一 傍線部①～③の主語を答えなさい。

問二 二重傍線部a「思ひわびはべりなば」について、(1)助動詞「な」の文法的意味と活用形を答え、(2)「思ひわびはべりなば」を口語訳しなさい。

問三 傍線部A「もてなしたまへり」について次の問いに答えなさい。

(1) 誰が誰に対してどのような態度を取ったのか、簡潔に答えなさい。

(2) なぜそのような態度を取ったのか、説明しなさい。

問四 傍線部Bの歌に込められた思いを簡潔に説明しなさい。

問五 傍線部C「恨みたまふ」は「恨み言をおっしゃる」という意味だが、誰がどのようなことに対して恨み言を言っているのか、説明しなさい。

問六 傍線部D「おぼしうとむなよ」(思し疎むなよ)とあるが、なぜこのように言ったのか、説明しなさい。

三 次の文章は、南北朝期に活躍した学者顔之推が、読書して勉学に励むことの重要性を説いたものである。よく読んで後の問いに答えなさい。(設問の都合上、送り仮名を省略したところがある。)(20点)

夫<sup>レ</sup>明<sup>ニ</sup> 六<sup>レ</sup>經<sup>之</sup> 指<sup>一</sup>、涉<sup>ニ</sup> 百<sup>レ</sup>家<sup>之</sup> 書<sup>一</sup>、縱<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup> 能<sup>ハ</sup> 增<sup>ニ</sup> 益<sup>一</sup> 德<sup>レ</sup> 行<sup>一</sup>、敦<sup>中</sup> 厲<sup>ス</sup> 風<sup>レ</sup> 俗<sup>上</sup>、猶<sup>ホ</sup> 為<sup>ニ</sup> 一<sup>レ</sup> 芸<sup>一</sup>、得<sup>ニ</sup> 以<sup>テ</sup> 自<sup>ラ</sup> 資<sup>一</sup>。父<sup>兄</sup> 不<sup>レ</sup> 可<sup>ニ</sup> 常<sup>一</sup> 依<sup>ル</sup>、郷<sup>国</sup> 不<sup>レ</sup> 可<sup>ニ</sup> 常<sup>一</sup> 保<sup>ツ</sup>、一旦<sup>レ</sup> 流<sup>レ</sup> 離<sup>ス</sup>、無<sup>ニ</sup> 人<sup>一</sup> 庇<sup>ヒ</sup> 廕<sup>一</sup>、当<sup>ニ</sup> 自<sup>ラ</sup> 求<sup>ム</sup> 諸<sup>ニ</sup> 身<sup>一</sup> 耳<sup>一</sup>。諺<sup>曰</sup>、「積<sup>ム</sup> 財<sup>一</sup> 千<sup>レ</sup> 万<sup>一</sup>、不<sup>レ</sup> 如<sup>ニ</sup> 薄<sup>一</sup> 伎<sup>一</sup> 在<sup>レ</sup> 身<sup>一</sup>」。伎<sup>之</sup> 易<sup>レ</sup> 習<sup>ヒ</sup> 而<sup>レ</sup> 可<sup>キ</sup> 貴<sup>ブ</sup> 者<sup>ハ</sup>、無<sup>キ</sup> 過<sup>ニ</sup> 読<sup>ニ</sup> 書<sup>一</sup> 也。世<sup>人</sup> 不<sup>レ</sup> 問<sup>ニ</sup> 愚<sup>一</sup> 智<sup>一</sup>、皆<sup>レ</sup> 欲<sup>ス</sup> 識<sup>レ</sup> 人<sup>之</sup> 多<sup>ク</sup>、見<sup>レ</sup> 事<sup>之</sup> 広<sup>ク</sup>。而<sup>シテ</sup> 不<sup>レ</sup> 肯<sup>ニ</sup> 読<sup>ニ</sup> 書<sup>一</sup>、是<sup>レ</sup> 猶<sup>ホ</sup> 求<sup>メ</sup> 飽<sup>ク</sup> 而<sup>シテ</sup> 嬾<sup>ニ</sup> 營<sup>ニ</sup> 饌<sup>一</sup>、欲<sup>シテ</sup> 暖<sup>ク</sup> 而<sup>シテ</sup> 惰<sup>中</sup> 裁<sup>ニ</sup> 衣<sup>一</sup> 也。夫<sup>レ</sup> 読<sup>ニ</sup> 書<sup>一</sup> 之<sup>レ</sup> 人<sup>ハ</sup>、自<sup>ヨリ</sup> 義<sup>キ</sup>・農<sup>一</sup> 已<sup>ラ</sup> 来<sup>一</sup>、宇<sup>宙</sup> 之<sup>レ</sup> 下<sup>一</sup>、凡<sup>ソ</sup> 識<sup>ル</sup> 幾<sup>ニ</sup> 人<sup>一</sup>、凡<sup>ソ</sup> 見<sup>ル</sup> 幾<sup>ニ</sup> 事<sup>一</sup>。生<sup>民</sup> 之<sup>レ</sup> 成<sup>一</sup> 敗<sup>一</sup> 好<sup>一</sup> 惡<sup>一</sup>、固<sup>シ</sup> 不<sup>レ</sup> 足<sup>ラ</sup> 論<sup>ズ</sup>、天<sup>地</sup> 所<sup>レ</sup> 不<sup>レ</sup> 能<sup>ハ</sup> 藏<sup>ク</sup>、鬼<sup>神</sup> 所<sup>レ</sup> 不<sup>レ</sup> 能<sup>ハ</sup> 隱<sup>ス</sup> 也。

(『顔氏家訓』による。)

注 明六経之指、涉百家之書……読書をして六経（儒教における六つの重要な経典）の主旨を理解し、百家（諸子百家）の書物にも目を通せば。

増益德行、敦厲風俗……道德になつた行いを増やし、世の中の風俗をよくする。

郷国……故郷と祖国。

流離……さすらう。

庇廕……助け守ること。庇護。

薄伎……取るに足りない技芸。「伎」は「技」に同じ。

營饌……食事の準備をすること。

裁衣……布を裁つて衣服を作ること。

生民之成敗好悪……人間の成功と失敗、愛好と嫌悪。人間の様々な営みをいう。

問一 傍線部①～④の文中における読み方を、送り仮名も含めてすべてひらがなで記しなさい。（仮名遣いは新旧どちらでもよい。）

問二 傍線部Aは読書の有用性について述べたものである。どういふことを述べているのか、わかりやすく答えなさい。

問三 傍線部Bを書き下し文に改めなさい。（仮名遣いは新旧どちらでもよい。）

問四 傍線部Cの「猶」は、「ア」はちょうど「イ」のようである」という意味で、アとイが同じような事柄であることを表す。ア・イに該当する事柄を、傍線部Cの前後を踏まえて、それぞれ説明しなさい。

問五 筆者はなぜ人間は読書すべきだと考えているのか。傍線部Dを踏まえてわかりやすく答えなさい。なお傍線部にある「義・農」は伏羲・神農（いずれも太古の聖王の名）を指し、「自義・農」は「自義・農」は太古の時代以来といった意味である。